

〈被爆地：長崎〉

## 世界の人たちへ そして原爆を知らない若い人たちへ

廣田 凱則（当時7歳）  
札幌市



私は爆心地より3.3km離れた長崎市鳴滝町で原爆の被害を受けました。国民学校2年生、7歳の時です。

8月9日、その日は雲ひとつなくよく晴れた日でした。朝早くから空襲警報が出ていましたが、間もなく解除になりました。私は自宅前で竹馬に乗って遊んでいました。その時、飛行機の爆音が聞こえてきたので家へ入ったのですが、その途端ピカーッと光り、ものすごい音と爆風が押し寄せてきました。母が「防空壕へ！防空壕へ！」と大声で言うので、一目散で社宅5軒の共同防空壕へ逃げ込みました。そこにはすでに4、5人の人がいましたが、顔を怪我して血だらけの人もありました。その後数時間たって家に帰ったところ、そこでまたビックリしました。床一面にガラスの破片が散乱し、襖や壁にガラスの破片が突き刺さっていたのです。こんなガラスの破片の上を素足で走ってよく怪我もなく逃げたものだと言っていました。

原爆の被害は巨大な爆発力によって人、すべての生物、自然環境全体におよび、かろうじて生き残った被爆者の生活手段も根こそぎ破壊しました。加えて、放射線による特別残虐な被害が発生しました。原爆の瞬間放射線は爆心地から1km以内ではほとんど致死量に達すると同時に、生きのびた人にも残留放射能で長く恐ろしい苦しみを与えました。

人は皆世界の平和を望み、誰もが平和に生きたいと願っています。その望みや願いは生きることの根幹をなすもので、「平和的生存権」という言葉があるように、平和に生きるのは基本的人権です。しかしそれは未だ保障されたことはありません。

なぜ人は戦争をするのでしょうか。簡単に言えば、自分が相手よりも

## 第1章 世界へ

多くの利益を得たいと考え、それがかなわないと攻撃をする、それが戦争の主要因です。そして攻撃する方が相手より強ければ、多くの利益を得ることになる。いわゆる「力の論理」です。

日本は今、アメリカ、ロシア、中国のように「力の論理」で動いている世界を、誰もが互いに人格を尊び、赦し合い、助け合うことを正義とする「愛の論理」による人類共同体に転換させる役割を果たす必要があると思います。

ヒロシマ・ナガサキの原爆から70年、被爆者の平均年齢は80歳近くになり、直接その体験を語り伝える人も少なくなっています。世界の皆さん、どうぞ核兵器の最初の犠牲者である被爆者の訴えに耳を傾けて下さい。とりわけ若い世代の皆さん、これからは若い人が原爆のすさまじさ、恐ろしさを学び、核兵器そのものを無くして、核戦争の不安のない平和な世界を築く中心になって活動してもらいたいと思うのです。